

年頭のご挨拶

「米チェン」から考えること

林産試験場長 菊地伸一



2015年を迎え、皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

北海道の米生産量は63万トンで、新潟県に次いでいます。昨年、「北海道米の道内の米消費量に占める割合（道内食率）が9割を超えて過去最高となった」と報道されました。道内食率が最低であった平成8年の37%から3倍近くに増えたこととなります。この30年、道産米の道内食率は次のような変化を示しています。

- ・昭和の末期、コシヒカリといった他県銘柄米販売の台頭による低下
- ・平成元年のきらら397デビューによるシェア回復とその後の急減
- ・ほしのゆめ、ななつぼし、ゆめぴりかなど良食味米の開発・投入、高橋知事が「米チェン」を訴えたTV-CMをはじめとする多様な普及活動による着実な向上

ここで見逃せないのが、きらら397デビュー前後の食率の変化です。平成元年にきらら397が登場することによって、5割を割り込んでいた食率は一気に10%以上高くなりました。その後数年間は5割以上を維持しますが、冷害による供給量の減とともに、栽培地域の拡大などにより品質の維持が困難となり、食率は37%まで一気に20%近くも低下します。この後、食率が5割を回復するまでに5年を要しています。新しい製品が受け入れられていく過程において、品質と安定供給がいかに重要であるか、一度損なわれたブランドイメージを回復することの困難さを示す一つの事例なのでしょう。

私たちが輸入材からのシェア奪還をめざして売り込みを図っている北海道の森林資源に関し、木材供給率63%などの目標値が示されているとともに、バイオマス発電、非木造が中心であった公共建築物や中層建築物の木造化といった新市場の創出が図られようとしています。

木材が、4階建て、5階建てといったこれまでになじみのない新しいマーケットで地歩を築いていくためには、きらら397が教えるように、品質と性能と供給の安定がカギになっていくことでしょう。さらに、ブランドイメージを損なわない細心さも必要となるでしょう。私たち林産試験場はこのように考え、たとえば、高品質な乾燥技術の開発に、高性能な構造材料の開発に、木材流通の合理化システムの開発に、慎重かつ果敢に取り組んでいるところです。

今年4月、林産試験場は地方独立行政法人として第2期の5年計画をスタートさせます。道立の22試験機関が単一組織となっちはじまった平成22年からの第1期5年、不十分さは多々ありますが、一方で、確実に成果を積み重ね、皆さまに貢献できた部面もあったろう、と自負もしています。これからの5年間も、木材利用の可能性を高めるべく、利用分野の拡大を図るべく、基礎研究に、応用研究に、直近の課題に対応する短期的な研究に、将来に投資する中長期的の研究にチャレンジしていきます。「林業の成長産業化」に貢献していきます。

引き続き、林産試験場へのご支援・ご協力を、そしてさらなるご鞭撻を心からお願い申し上げます。

本年が、北海道の森林・林業・木材産業にとって希望の持てる年となりますように。皆様の発展の年となりますように。